

# 叛逆する「中国のノラ」

## —廬隱の再婚と近代家庭批判—

羽 田 朝 子\*

### はじめに

中国近代の五四新文化運動（1910年代後半～20年代）の中で、西洋思想の洗礼を受けた知識青年たちは「個」の権利を主張し、中国を支配してきた封建制度を打ち倒そうとした。彼らはまず封建制を支える旧い家の束縛からの解放を叫び、「父母の命、媒<sup>めい</sup>酌<sup>しやく</sup>の言」による旧式結婚に反対し、自由恋愛を経た結婚を求めた。こうした家庭革命に関する言論の中心となったのは、文学革命の旗手でもあった胡適（1891～1962）である。彼は1918年6月、『新青年』（4巻6期）にイブセン劇『人形の家』を翻訳・発表した。同時に論文「イブセン主義」を巻頭に掲載し、この劇の女主人公ノラを封建的家に反抗して家を飛び出した、勇気ある女性として紹介したのである。

本来、イブセン『人形の家』（1879）は欧米においては近代批判として、具体的には近代社会における恋愛結婚した夫婦のあいだに起こった葛藤をテーマにしている。一見愛に満ちた夫婦でありながら、彼らの間には実は経済力を持つ夫と持たない妻の力関係が歴然と存在する。ノラが家を出たのは封建社会の古い思想に憤ったからではなく、近代家庭が内包する男女の問題——ジェンダー非対称に気づいたからであったのだ。しかし胡適は個人の自由意思による「恋愛」がまだ受容されていない当時の中国にあって、『人形の家』を目前の問題であった封建的家への批判に通じる作品として紹介した。そしてノラの家出を男尊女卑、三従四徳を強いる家から逃れ、自由と愛情に満ちた結婚を求めたものとして解釈したのである<sup>1</sup>。

この時期、胡適は『新青年』に陸続と女性解放理論を発表している。例えば「貞操問題」（5巻1期1918.7）では恋愛結婚を平等な夫婦関係を実現するものとして提唱し、「アメリカの婦人」（5巻3期1918.9）では恋愛結婚をする自立したアメリカの女性を紹介している。こうした胡適の恋愛に関する一連の言説——「ノラ言説」は、当時の旧い家の束縛に苦しんでいた知識青年達に大いに受け入れられた。そして彼らはノラを新しい女性のシンボルとしてもてはやし、近代家庭の実現を理想として掲げたのである<sup>2</sup>。

こうした五四の薫陶を受けた若い知識人女性の中から、自由恋愛に基づく近代家庭を実現する者が現れた。この時期の代表的な女性作家である廬隱（1899～1934）もその一人である。彼女は五四運動が勃興した1919年に北京女子師範大学に入学した。在学中に文学研究会に参加し、その機関誌『小説月報』に青年の恋愛と封建的家との衝突を描いた処女小説「一個作家」（12巻2号1921.2.10）を発表している。

実生活においても廬隱は文学研究会の同人である郭夢良（1899～1925）との恋愛を成就させ、1923年に結婚している。しかし、この結婚は郭に旧式結婚によって娶った妻がいたため世間の批判を浴びた。当時の廬隱について、友人の劉大杰は次のように語っている。「独断独行の自信に満ちた行動は、まるでイブセンの「ノラ」のようだった」<sup>3</sup>と。

結婚後、2年ほどで郭夢良が肺病のため亡くなり、廬隱は寡婦となるが、その5年後の1930年に8歳年下の大学生・李唯建（1907～1981）と恋愛の末に再婚し、世間を驚かせた。そして難産によって命を落とす1934年まで、廬隱はその作品の中で時代の過渡期にあって

\* 比較文化学専攻

苦悩する女性の恋愛・結婚・仕事・人生観について書き続けた。

このように廬隠は五四新文化運動の洗礼を受け、「中国のノラ」を自ら演じたのだが、30年代になると彼女はノラの本来の問題——近代家庭にひそむ男女の問題をいち早く意識し、近代家庭への批判を展開するようになる。そして廬隠自身、『廬隠自伝』（上海第一出版社、1934年）の中で、この30年代の時期を思想の転換を経て飛躍した「開拓期」とであるとして高く評価しているのだ<sup>4</sup>。

このような廬隠の自己評価に関わらず、先行研究ではこの時期の作品に注目したものは少なかった<sup>5</sup>。それは茅盾が発表した「廬隠論」（『文学』3巻1号1934年）によるところが大きい<sup>6</sup>。彼は廬隠を「五四の時代の子」と呼び、彼女の初期の作品を五四期の思想を反映したものとして高く評価したが、以後の作品はその枠を出ない「停滞した」ものと評価したのだ。茅盾の目には、廬隠が描いた女性知識人をとりまく問題は、どれも「家庭の瑣事」として映ったのである。

しかし五四期の他の女性作家たちが恋愛結婚の後には夫に寄り添い、それ以上恋愛や家庭について掘り下げなかったのに対し、廬隠は生涯を通して近代家庭について思考し続けた稀有な作家である。

そこで本論では、廬隠が五四の終息後の30年代に執筆した作品に注目し、さらに彼女の近代家庭に対する思想の変遷を検討する。これを通して、五四期に理想とされた近代家庭が実際のところ女性にとってどんなものであったのか、女性たちはそれによりどのような意識の変革を迫られたのかを考察したい。

## 1. 近代家庭への批判

まず廬隠が30年代に展開した近代家庭批判の代表的な言説を見てみよう。以下に「男性と女性（男人和女人）」（『時事新報』副刊『青光』1933.8.25）、「今後の女性の活路（今後婦女的出路）」（『女声』1巻12期1933.3.16）という2篇の散文を取り上げる。

### 1.1 「男性と女性」——恋愛に潜む男女不平等の指摘

「男性と女性」は小説風の形をとっており、登場人物は恋愛によって結ばれた夫婦である。詩人である夫は「平凡な家庭生活ではインスピレーションを満たすことができない」と、他に恋人をもっている。妻は夫の「君こそが世界中で一番僕を理解している」という甘い言葉に負け、笑顔で彼を恋人との逢瀬に送り出す。家に一人残された妻は突如として目覚め、次のように言う。「ノラの考えはすばらしいわ。この人形の家を棄てて、他の道を求めたのは真理だわ!」と。妻が家を出ようと身支度を整えたところに、夫が帰ってきた。「許してくれ、僕たちの可愛い二人の子供のために、僕を許してくれ!」迫いする夫を見た妻は情にほだされて、「ノラは結局イブセンの理想人物にすぎないのだから」と家出を思いとどまってしまう。

廬隠はこの作品において、平等な男女関係をもたらすはずの恋愛の陥穽を暴き、そこに潜む男女不平等を痛烈に批判している。主人公の女性がノラを思いながらも、夫への「愛」のために不平等を許容し、最後は家にとどまる姿が描かれている。この作品を廬隠は次のように締めくくる。「男性はこのように永遠に成功をおさめ、女性はこのように永遠に沈淪

したままなのだ！（男人就這樣永遠獲得成功，女人也就這樣萬劫不復的沉淪了！）」<sup>7</sup>と。

## 1.2 「今後の女性の活路」——性別役割分担への批判

次の論文「今後の女性の活路」では廬隱は良妻賢母主義に反対し、近代家庭における性別役割分担が女性の独立性を失わせるのだと批判する。

時代の歯車は間断なく回り、イブセンは早くに女性の進むべき道を我々に指し示した。……しかし事實は、ノラはごく少数で、大多数の女性は、依然として人形の家的主人公なのだ。さらに怠け癖のついた女性は母としての権利を守ることを楯に、裏で寄生的享樂生活を送っている。これに加えて一部の女性は、頭の中にまだ封建時代の余毒が残っていて、「男は外、女は内」の荒唐無稽な説を信じ、ご苦労にも個性のない従順な賢妻、家事を切り盛りする良母になっている。同時に多くの男性中心主義の教育家は、……女性の知力体力は男性に適わないとか、良妻賢母は女性の唯一の天職だとかいって、これらの偏った言葉の帽子を女性の頭にかぶせ、彼女たちが家の内に帰らざるを得ないようにしている。（時代的輪子不停息的在轉動，易卜生早已把婦女的出路指示了我們，……不過在事實上，娜拉究竟是極少數，而大多數的婦女呢，仍然作着傀儡家庭中的主角，而且有一些懶散慣的婦女，她們拿擁護母權作檔箭牌，暗地里過着寄生的享樂生活，另有一部分人呢，因為腦子里仍存着封建時代的余毒，認定“男治外女治內”的荒謬議論，含辛茹苦作一個無個性的柔順賢妻，操持家務的良母，同時許多男性中心的教育家，……甚麼婦女的智力體力趕不上男人羅，又是賢妻良母是婦女唯一的天職羅，拿這些片面之辭的帽子壓到婦女頭上，使她們不得不回到家裡去。）

廬隱は、女たちは家に閉じ込められた結果、独立した人格を失い、社会的地位を失い、個性を埋没させてしまった、と指摘するのである。そして彼女はこうした現状を打開するために、次のように提言する。家庭は男女が共同で作るもので、経済は男女で分担すべきあり、また家事も当然男女で負担すべきである。そして最後に次のように言う。

今後の女性の進むべき道は、家庭の囲いを打破して社会に出ること、つまり人形の家を逃げ出し、人の生きるべき生活をし、女になるだけでなく、さらに人にならねばならない。これが私のただひとつのスローガンである（我對於今後婦女的出路，就是打破家庭的藩籬到社會上去，逃出傀儡家庭，去過人類應過的生活；不僅僅作個女人，還要作人，這就是我唯一的口號了。）<sup>8</sup>

このように廬隱は、イブセンが本来提出したノラの問題——近代家庭にひそむ男女の問題を意識し、近代家庭に対して叛旗を翻したのである。

では五四の洗礼を受けた廬隱は、どのような思想の変遷を経て近代家庭を批判するに至ったのだろうか。それを検討するために、以下の章では、廬隱が生涯で経験した3つの家——生家、最初の結婚、再婚について見ていきたい。

## 2. 生家と最初の結婚

### 2.1 旧い家の暗い記憶

廬隱は原名を黄英といい、1899年5月4日に福建省閩侯で生まれた。父は清朝の挙人で、

母は教育を受けたことのない旧式の女性であった。母は廬隱が母方の祖母が亡くなった日に生まれたため、不吉な子として忌み嫌い、乳母に預けてしまう。病弱であった廬隱は母をはじめ三人の兄、妹からも嫌われ、愛に恵まれない幼児期を過ごしたという。廬隱は『廬隱自伝』（以下、『自伝』）で当時について次のように述べている。

（私は）二歳の時には体中にできものができ、1日中泣くので、母は怒ってもう少しで殴り殺すところだった。乳母がそれをみてかわいそうに思い、次のように母に持ちかけた。私を彼女の家に取り、もし良くなったら連れ戻し、死んだらそれまでということにしよう、と。母はこの申し出を聞くと、躊躇することなく受け入れた。（在兩歲的時候，長了一身的瘡疥，終日號哭，母親氣憤得差一棒打死，還是奶媽看看我可憐，同我母親商議，把我帶到他家裏去養，如果能好呢，就送回來，死了呢，那也就算了，母親聽了這個提議，經毫不躊躇的答應了。）<sup>9</sup>

1905年、廬隱6歳の時に父が心臓病で亡くなる。その時母は36歳、長男の兄は15歳であった。その後一家は北京の母方の叔父のもとへ身を寄せる。1908年、母は9才の廬隱を教会が経営する北京女子慕貞学院へ入学させる。その理由は学費が安く、廬隱を厄介払いできるからだった。慕貞学院の不健康な生活環境と粗悪な食事から逃れるために、廬隱は奮起して勉学に励んだ。彼女はまず高等小学校に合格、さらに公費の北京女子師範学校預科に合格し、母や親戚達を驚かせた。

18歳のとき女子師範預科を卒業したが、当時は女性が進学できる大学はなかった。また兄が留学中であったため、廬隱は家計を助けなくてはならず、女子中学や小学校で教鞭を執った。1919年、北京女子高等師範学校（後の北京女子師範大学）の学生募集が始まると、当時20歳だった廬隱は受験を希望する。しかし母は大反対して次のように言った。「女の子が中学を卒業したならそれで十分。さらに勉強して、いったい何をするつもり？それに私は今お前にやる金はない。自分でよく考えて見なさい！（一個女孩子，已經中學畢業，就很夠了，還要讀書，作怎麼？而且我現在也沒閒錢來供給你，你自己去細想想吧！）」<sup>10</sup>

そのため廬隱は安徽で半年間教壇に立ち、受験の資金を用立てると、北京に戻った。試験には間に合わなかったが、9月から女子高等師範学校国文部に聴講生の資格で入学し、半年後に首尾よく正規生として編入することができた。

## 2.2 最初の結婚

廬隱が女子高等師範に入った後も、あくまで進学に反対な立場をとる母とは葛藤が続いており、母は一切の学費の援助をしないばかりか、彼女が家に帰るたびなじったという。

廬隱が女子師範に入った1919年はちょうど五四運動が起こった年であり、西洋の新しい学説が続々と中国に紹介された。廬隱はそれらに大いに興味をもち、新しい書籍や雑誌を買っては同級生と議論したという。また廬隱は女子師範で胡適の「中国哲学史大綱」の授業を受けており<sup>11</sup>、当時彼が推進していた「ノラ言説」を受容していたと考えられる。廬隱は積極的に社会運動に身を投じ、学生会の幹部に選ばれ、デモや集会にも精力的に参加した。他大学合同の会にも出席し、そこで北京大学の哲学系で学んでいた郭夢良と知り合った。廬隱は彼の冷静沈着な人柄や、また発表論文を多く目にしたことで彼の思想を知り、

惹かれていったのである。

廬隱は1922年23歳の時に女子師範を卒業し、翌年に北京大学を卒業した郭夢良と結婚した。しかし郭夢良には旧式結婚による妻があったため、廬隱は法律上では「妾」となったのである。そのため廬隱の家族や、友人たちはみな彼女を罵り、嘲笑したという<sup>12</sup>。廬隱は封建勢力に果敢に反抗し、恋愛を旗印とする「中国のノラ」となるべく新しい家に飛び込んでいったのである。

### 2.3 近代家庭への幻滅——主婦の憂鬱

廬隱は旧い家において封建的な迷信や男尊女卑によって苦しめられた暗い経験を持っていた。その分、彼女は自由と愛情に満ち、男女平等な生活をもたらしてくれるはずの恋愛結婚に対し、大きな期待を持っていただろう。しかし結婚後まもなく現実と理想との違いに苦悩することになるのである<sup>13</sup>。

廬隱は1925年に女子師範時代の創作を集めた作品集『海浜故人』を出版し、この年の初めに女兒（郭薇萱）を出産した。しかし同年10月には夫・郭夢良を肺病で亡くしてしまう。この間の結婚生活のことを、廬隱は『自伝』の中で次のように語っている。

私の処女作『海浜故人』が出版されてから、生活に変化があった。その変化の中で私の心境は複雑であった。一方では満足し——様々な困難はあったが、私は郭君と結婚していた。また一方では失望を感じていた。理想の結婚生活と実際の結婚生活は、全く違っていただけだ。そんな心境の時に家庭内の瑣事も重なり、半年くらいは原稿が書けなかった。（在我的處女作、『海濱故人』出版以後，我因為生活上發生了變化，在這種變化中，我的心情是複雜的，一方面我是滿足了，——就是在種種的困難中，我已和郭君結了婚，而一方面我是失望了——就是我理想的結婚生活，和我實際的結婚生活，完全相反，在這種心情中，又加着家庭的瑣事，我幾乎擱筆半年不曾寫文章。）<sup>14</sup>

廬隱はこの時期、恋愛結婚後に家庭に入り主婦となった女性の憂鬱をテーマとした作品を描いている。「勝利以後」（『小説月報』16巻6号1925.6.10）では、恋愛のために全てを犠牲にし、家と戦って困難を乗り越え結婚した女性——「勝利」した女性が、結婚後は社会で活動する場を得られず、人生の高遠な理想と縁が切れてしまったことに苦しむ<sup>15</sup>。また「何處是歸程」（『小説月報』18巻2号1927.2.10）では、結婚後に妻や母となった女性が、家庭の瑣事に縛られる生活に疑問を抱き、社会事業に参加できない自分は、時代の落伍者だと煩悶するのである<sup>16</sup>。

どちらの作品も近代家庭に幻滅する女性の姿が描写されており、彼女たちは家庭に閉じ込められて社会的地位を失い、「個」を失ってしまったことに気づいて苦悩するのである。彼女たちの苦しみは近代家庭に潜む男女不平等——性別役割分担によるものなのだが、この時点では廬隱はそこまで指摘することではなく、ただ家庭に「帰程（＝安息の場）」を見出せない懊悩だけを描いている。

郭夢良が1925年10月に亡くなると、廬隱は彼の棺に付き添って郭の実家の福建に行く。彼の地には姑と正妻がいたが、そこで娘とともに滞在し、女子師範で教鞭を執った。しかし姑と折り合いがあわず、半年後に上海へ戻っている。そして大夏大學附中の女生徒指導



員をして生活を支えた。この時期郭夢良の死と前後して、廬隱は母と親友の石評梅を亡くしており、身边に不幸が続いたため、悲嘆のあまり酒に溺れたという。劉大潔はこの時の彼女について次のように言っている。「(廬隱は) 子供を抱えて、収入は少なく、生活がとても苦しかった。…私は彼女に過去を忘れて新しい愛のある生活を始めるように言ったが、彼女は『男性! 愛情! これらを私は本当に恨んでいるわ。これらはみな実に私を苦しめた。私は愛情という悪魔から離れたい』と語った」<sup>17</sup>と。この言葉からも、廬隱が結婚というものに失望していたことが窺える。

### 3. 再婚と思想の転換

#### 3. 1 「小情人」との再婚

寡婦となった廬隱は恋愛や結婚といったものを遠ざけ、娘を養うため教壇に立ちながら文章を書いて生計を立てていた。しかし 1928 年、廬隱 29 歳のとき、清華大学に入学したばかりの李唯建と出会う。その時李唯建は 21 歳、西洋文学を専攻し、パイロンやシェリー、タゴールを敬愛する若き詩人であった<sup>18</sup>。李唯建は北京大学哲学科の教授・林宰平を訪問した時、机の上にあった廬隱の編輯した文学雑誌『華嚴月刊』を目にしたことから、彼女に興味を持った。彼は林宰平に紹介を依頼し、林宰平と廬隱との共通の友人である瞿世英の家で二人は会うことになった。その後二人は手紙をやりとりし、頻繁に往来するようになる。そして李唯建の熱心な求愛に廬隱が応える形で、二人は 1930 年に結婚したのだ<sup>19</sup>。

廬隱は李唯建について『自伝』で次のように述べている。

彼は勇敢で、徹底して新しい時代の人物であり、頭の中には封建思想の遺毒がなかった。一切を憚ることなく、彼には熱烈な純情があり、熱烈な想像があった。(他是一個勇敢的, 澈底的新時代的人物, 在他的腦子裏沒有封建思想的流毒, 也沒有可顧忌的事情, 他有着熱烈的純情, 有着熱烈的想像。)<sup>20</sup>

廬隱にとって最初の結婚は「封建的家への反抗」という意味も有していた。しかし今回の再婚は意味が違っていた。廬隱には亡くなったとはいえかつて愛した夫があり、その男性との間に娘があり、さらには李唯建との間には 8 歳の年の差があったのだ。

そのため二人の結婚はジャーナリズムを驚かせ、文壇にセンセーションを巻き起こした<sup>21</sup>。特に二人の歳の差は当時にあつて大いに非難的となった<sup>22</sup>。また前夫との子(再婚当時 5 歳)は若い李唯建を父として認めなかったという<sup>23</sup>。

また大衆のみならず、廬隱と同じように五四の洗礼を受けた知識人もこの結婚には眉をひそめた。例えば女性作家の蘇雪林は廬隱の女子師範の同級生でもあるが、「關於廬隱的回憶」(『文学』2 卷 3 号)で次のように言っている。

何年か前、彼女(廬隱)と李唯建さんが恋愛して日本に渡り、まもなく結婚したという話を聞いた。また李さんが彼女より若かったことで、「廬隱の若い情人」はあつという間に噂的となった。民国 19 年(1930 年)に私が安慶の安徽大学で教鞭を執っていたとき、舒畹蓀や呉婉貞(どちらも女子師範時代の友人)……と廬隱の近況について語りあった。二人は異口同音に彼女のことをふしだらだと言ひ、以前すでに妻のある郭さんと結婚したのだから大きな間違いだったのに、今また年齢が離れている李さ

んと恋愛するなんてもってのほかだと言った。私も彼女ふたりの批判は善意からのものだと知っていたし、私も盧隱の行動は尋常でないと思っていた。(前幾年聽見她和李唯建先生戀愛,同渡扶桑,不久有結婚之說.又聽說李君比她年輕,一時“盧隱的小情人”傳爲佳話.民國十九年我到安慶安徽大學教書,會見舒畹蓀女士和吳婉貞女士……談到盧隱近況,二人異口同聲地批評她太浪漫,並說她從前與使君有婦的郭君結婚已是大錯特錯;現在又與年齡相差甚遠的李君戀愛,更不應該了.我知道她二人的批評是善意的,便是我也覺得盧隱這種行爲太出奇。)<sup>24</sup>

こうした中、盧隱は「恋愛は二人のことで、他の人が口をはさむことではない」<sup>25</sup>という態度を貫き、自分たちの正当性を宣言するかのようになり、李唯建との恋愛中の往復書簡を天津『益世報』(1930年2月14日～4月8日)に発表した。さらに翌年それを李唯建との共著『雲鷗情書集』(1931年2月神州国光社)として出版したのである。

### 3.2 思想の転換

実は盧隱は郭夢良が亡くなってから李唯建と出会うまでの間に、ある男性から求愛されていたが、その愛を拒んでいる。その男性とは亡夫・郭夢良の友人の弟で、当時上海の法政大学の学生であった瞿冰森である。その経験は『帰雁』(『華嚴月報』1巻1期～8期、1929.1.20～7.20)に描かれており<sup>26</sup>、次のような内容である。夫や母の死から立ち直れずにいる主人公の前に、力強く励ましてくれる青年が現れる。その熱烈な求愛に対して、「私」は自分が寡婦であり、年上であること、そして世間の風評を怖れて相手を受け入れることが出来ない。青年はその心を理解できず、ついには他の女性との結婚を選択してしまう<sup>27</sup>。

この作品に対し、盧隱は『自伝』の中で次のように言う。

『帰雁』を創作したときは、私の思想が転換していた最中であつた。……『帰雁』の中には私の熱烈な叫び、熱烈な追求がある。しかし私の頭の中には封建時代の余毒が残っており、礼教を打破するよう高らかに叫ぶことはできなかった(到了我作歸雁的時候,我的思想已在轉變中,……在歸雁中,我有着熱烈的呼喊,有着熱烈的追求,只可恨那時節,我腦子裏還有一些封建時代的餘毒,我不敢高叫打破禮教的藩籬)<sup>28</sup>

その後、盧隱は自身が再婚に踏み出すことで、自らに残る「封建時代の余毒」と訣別しようとしたのだろう。再婚後、盧隱は『女の心(女人的心)』(『時事新報』1933.2.14～5.5)を発表し、恋愛結婚をして娘を産んだ女性が、年下の男性との不倫の恋愛に踏み出す姿を描いている<sup>29</sup>。盧隱はこの時期を思想の転換を経て飛躍を遂げた「開拓期」と呼び、その代表作品として『女の心』を挙げている<sup>30</sup>。

### 4.『女の心』——女性だけに求められる貞操

『女の心』のあらすじは以下の通りである。ヒロインの素璞は理想であつた恋愛結婚をし、一女をもうけた。しかし夫・賀士は結婚後すぐに欧州に留学へ行ってしまう、既に三年も会っておらず、賀士からの愛を感じられない日々を送っていた。そんな時に友人・黎雲の結婚式で出会った学生・純士と往来するようになる。お互いに恋愛感情を持ちながらも、素璞は自分が夫と娘があること、年上であることに躊躇し、それ以上の関係に進もう

としない。ところが、ある日受け取った賀士からの手紙には、彼がベルリンでドイツ人女性と知り合い、親しく交際していることが書いてあった。

素璞はショックを受け、これをきっかけに純士との恋愛に踏み出す。二人の恋仲が世間の噂になると、二人は愛を貫くためアメリカ留学へ赴く。それから素璞は単身でアメリカからドイツに渡り、夫に会って離婚を申し出る。そして離婚が成立すると再度アメリカに渡って純士と結婚するのである。

この作品では、『帰雁』と異なりヒロインは新しい恋愛に踏みだし、それを成就させるために主体的な行動を見せている。廬隱はこの作品に対し、自ら次のように評している。

私が書いた『女の心』では、大胆に垣根を打ち壊すスローガンを叫び、旧勢力に反対し、より大胆に女性だけに求められる貞操を否定したものだ。(我所寫的『女人的心』

我大膽的叫出打破藩籬的口號,我大膽的反對舊勢力,我更大膽的否認女子片面的貞操。)<sup>31</sup>

本来、男女の自由意志に基づく自由恋愛は、どちらか一方に愛情がなくなれば関係を解消するのが原則であるのだが、この作品で廬隱は実は恋愛にも「女性だけに求められる貞操」が存在していることを指摘している。廬隱はヒロインがこうした貞操に束縛され、苦しむ「女の心」を詳細に描写しているのだ。

まず主人公・素璞は純士に魅かれながらも、夫の不貞を発見するまでは恋愛に踏み出そうとしない。夫からの手紙に女性の影を見た素璞は、次のように考えるのである。

賀士が最初に自分にすまないことをしたのだ。純士に出会いはしたけれど、賀士のこの手紙の前にはずっと自分を抑えて、礼を超える行いをしようとはしなかった。今、賀士がミリアム嬢を愛したなら、私に恋人がいても、皆は相殺してくれるだろう。(這是賀士先對不起她,……雖然認得純士,事實上是在賀士這封信之前,不過自己一向是克制着情感,不敢有一些越禮的行爲,現在賀士既然鍾情於米利安小姐,那我就是有個把情人,也大家抵銷得過呢。)(a)

そして素璞は恋愛に踏み出した後も、自分がもうすでに夫を愛していないからには、この結婚を続けていく必要はないのだと考える一方で、夫がミリアム嬢と関係があるという確証を得ないまま不貞を犯した自分を責めて苦しむのである。「女の心はどうしてこのように思い乱れるのだろう。賀士はただ自分だけの快樂を追い求めて、妻や子のことを思ったりはしないというのに、なぜ私はこんなに臆病なの。(女人的心爲甚麼應是這樣多糾紛,你看,賀士他只知尋自己的快樂,再不置念妻兒的,我爲甚麼這樣怯弱。)(b)と。

また素璞は妻としてだけでなく、母や娘であることから逸脱することに怖れ、逡巡し続ける。純士と共にアメリカに渡って新生活を始めようとする時ですら、晴れやかな表情の純士とは対照的に、素璞は次のように言う。

「純士、あなたは身体の自由だけで、魂の自由は考えていないのね。」「不自由なのかい?」純士は不思議そうに言った。「ええ、賀士や娘、そして母の前では、私は裁きを待つ四人なの。」「(純士!你只知道身體的自由,而不曾顧慮到靈魂的不自由!」「不自由嗎?」純士詫異的說:「你的靈魂有甚麼不自由?」「當然,在賀士的面前,在我女兒的面前,甚至在我母親的面前,我都不免是個待罪的囚犯呢!」)(c)

こうした女の心を、男性の純士は理解することができない。二人が結婚して帰国した後、



素璞は世間や家族の目を憚って別居を提案する。素璞の心を測りかねた純士は、弟の明士夫婦に次のように相談するのである。

「素璞は新文化の洗礼を受けており、礼教を打破するなら、徹底的にするべきなのに、どうして二歩進んでは一歩退くのだろうか?」「これこそ女の心なのよ」明士の妻は言った。「歴史を見てみなさい。古くから今まで、社会の糾弾を恐れなかった女が何人いるかしら?女を責めることはできないわ。この社会は女にとっても厳しく責任を追及するもので、素璞ねえさんの今の心はとても苦しいはずよ。彼女はこの社会で女の先駆けになろうとしているのだから……」(「素璞は受過新文化的洗禮的,她既想打破禮教的藩籬,就應當作個徹底,爲甚麼走兩步又退一步呢?」「哎,這就是女人的心了!」明士の妻說:「你們翻開歷史看,從古到今,有幾個女人不怕社會的譏彈呢?本來難怪女人,這社會對於女人是特別的責備得嚴,我想素璞姊現在的心也夠苦了,她要做這個社會裡的女人先鋒……」)(d)こうした素璞の苦しみは、李唯建との恋愛における廬隱自らのものであっただろう。平等な男女関係をもたらすはずの恋愛においても、女性はいくつもの束縛——貞操や「母」であること——に縛られている。廬隱はこの作品において周囲の社会の批判と戦いながらも、自らに残る「封建時代の余毒」のために一進一退して苦しむ「女の心」を掘り下げたのである。そして彼女は最後に素璞が純士とともに生きていく覚悟をする結末を描くことにより、この「女の先駆け」が束縛を克服し、明るい未来を目指していく姿を示している。

### おわりにかえて——叛逆するノラ

廬隱は二回の結婚を経て、近代家庭に潜む女性の問題を深く掘り下げて思考するようになった。そしてそれをテーマにした創作や女性解放論を執筆したのである。それらの作品はみな近代家庭に潜む男女の問題をテーマにしており、五四期の作品にはなかった鋭い女性意識に満ちている。

例えば「花瓶時代」(『時事新報』副刊『青光』1933.8.11)では次のように言っている。

天が慈悲を發して、この世の尊大な男たちを動かし、彼らの高貴な手によって、女性たちを奴隸階級から解放したことに感謝せねばならない。現代の女性は得意になって花瓶時代の幸運を享受している。…しかし花瓶たちはいつの日か、楽しみもてはやす男たちに見かけ倒しだと嫌われて、粉々に割られてしまうかもしれないのだ!…だからこれら花瓶たちの運命は悲惨なもので、女性はいづれを救うことを考えねばならず、このような花瓶の時代を打破しようと覚悟し……決して男達に恩恵を乞うたりしてはならないのだ。(這不能不感謝上蒼,它竟大發慈悲,感動了這個世界上傲岸自尊的男人,高抬貴手,把婦女釋放了,從奴隸階級中解放出來.現代的婦女,大可揚眉吐氣的走着她們花瓶時代的紅運……但是花瓶們,……說不定有一天,要被這些欣賞而鼓舞着你們的男人們,嫌你們中看不中吃,砰的一声把你們摔得粉碎呢!……所以這個花瓶的命運,究竟太悲慘;你們要想自救,只有自己決心把這花瓶的時代毀滅,……不能再妄想從男人們那裡求乞恩惠。)<sup>32</sup>

このように廬隱は、五四期にエリート男性知識人達が主張した「ノラ言説」で切り捨てられた問題——ジェンダー非対称に気づいた。そして旧い家を出ただけで満足し、近代家庭のなかで安逸する「中国のノラ」に警鐘を鳴らしたのである。

## 注

1. 中国におけるイブセン『人形の家』受容と胡適の意識的な「誤読」については、張競『近代中国と「恋愛」の発見』（岩波書店、1995.6）を参照。
2. 五四期の恋愛神聖の思潮に関する先行研究としては、以下のものがある。清水賢一郎「革命と恋愛のユートピア——胡適の＜イブセン主義＞と工読互助団」（『中国研究月報』中国研究所 573 1995.11）、清水賢一郎「ノーラ、自動車に乗る——胡適「終身大事」を読む」（『東洋文化』東京大学東洋文化研究所 77 1997.3）、藤井省三「恋する胡適——アメリカ留学と中国近代化の形成」『岩波講座現代思想Ⅱ 20世紀知識社会の構図』（岩波書店 1998）、拙稿「胡適『終身大事』考」（『奈良女子大学人間文化研究科年報』20号 2005.3.31）
3. 劉大潔「黄廬隱」（肖鳳『廬隱評伝』中国社会出版社 2008.1 所収、224 頁）
4. 『廬隱自伝』「思想的転変」（第一出版社、1934.10.15、97～98 頁）
5. 90年代からはフェミニズムの観点から後期の作品も見直しがされており、以下の論文がある。劉思謙『「娜拉」言説——中国現代女作家心路紀程』上海文芸出版社 1993、白水紀子「中国文学にみる「近代家族」批判」『東洋文化研究所紀要』第 143 冊 2003.3
6. 茅盾「廬隱論」（『文学』3 卷 1 号 1934 年）
7. 「男人和女人」（『廬隱散文全集』中原農民出版社 1996.12、141 頁）
8. 「今後婦女的出路」（『廬隱散文全集』前出、163 頁）
9. 『廬隱自伝』「童年時代」（前出、3 頁）
10. 『廬隱自伝』「大学時代」（前出、56 頁）
11. 『廬隱自伝』「著作生活」（前出、79 頁）
12. 劉大潔「廬隱回憶記」（『現代中国文学作家傳記』実用書局 1972.7、80 頁）
13. この時期に廬隱が創作した近代家庭への幻滅をテーマにした作品については、白水紀子「中国文学にみる「近代家族」批判」（前出）が取り上げている。
14. 『廬隱自伝』「著作生活」（前出、83 頁）
15. 「勝利以後」（『廬隱選集』上、福建人民出版社 1985.5）
16. 「何处是归程」（『廬隱選集』上、福建人民出版社 1985.5）
17. 劉大潔「廬隱回憶記」（『現代中国文学作家傳記』前出、81 頁）
18. 『中国文学作家辞典』現代第三分冊（四川文芸出版社 1985.3、188～189 頁）
19. 廬隱と李唯建との恋愛のいきさつについては、以下を参照。李唯建「我与廬隱の初次見面」（林偉民『海浜故人 廬隱』人民文学出版社 2001.1 所収、63～66 頁）、肖鳳『廬隱評伝』（中国社会出版社 2008 年 1 月）
20. 『廬隱自伝』「思想的転変」（前出、96 頁）
21. 謝冰瑩「黄廬隱」1948 年 3 月 24 日（『作家印象記』1967 年 1 月）
22. 孔尊「黄廬隱迷恋小丈夫」『文壇史料』1944 年 11 月
23. 「五四時代最伝奇的女作家廬隱」（『幸福家庭』5 月号 1969 年）
24. 蘇雪林「關於廬隱的回憶」（肖鳳『廬隱評伝』中国社会出版社 2008.1 所収、216 頁）
25. 謝冰瑩「黄廬隱」（前出）
26. 肖鳳『廬隱評伝』（前出、65 頁）
27. 「帰雁」（『廬隱小説全集』時代文芸出版社、1997.3）
28. 『廬隱自伝』「思想的転変」（前出、96 頁）
29. 「女人的心」（『廬隱小説全集』前出）4 章の引用は以下の通り。（a）705 頁、（b）708 頁、（c）736 頁、（d）764 頁
30. 『廬隱自伝』「思想的転変」（前出、98 頁）。また『女人的心』に関する先行研究として、高屋亜希「廬隱『女人的心』に見る「不貞」」（『中国文学研究』25 期）がある。
31. 『廬隱自伝』「思想的転変」（前出、97～98 頁）
32. 「花瓶時代」（『廬隱散文全集』前出、138～139 頁）

## 论“中国的娜拉”庐隐的反叛

羽田 朝子

在中国五四新文化运动中，青年知识分子受到了西方思想的影响，他们主张打破封建社会和封建家庭的观念，并强烈反对父母为主的包办婚姻，追求自己为主的自由恋爱、自由婚姻。他们热烈地赞扬易卜生《玩偶之家》笔下的女主角娜拉，因为在他们眼中，娜拉就是反抗封建家庭，为了追求自由恋爱而逃出家门的女英雄。

当时的女性作家庐隐（1899～1934）也受到了五四思潮的熏陶，自己扮演“中国的娜拉”的角色，实行了家庭革命。她经历两次结婚生活，进一步深入思考现代家庭隐而不见的妇女问题。她发现了五四知识分子的言论所忽视的问题乃在于男女不平等。本论针对于庐隐在 30 年代所发表的女性解放言论，及对近代家庭的批判等方面做深入探讨。